

高度経済成長がもたらしたものは……

これまで女性問題が論じられることはあっても、男性問題が語られることはあまりありませんでした。けれども男性のライフスタイルを振り返ってみると、男性もまた「男は仕事、女は家庭」という固定的な性別役割分業に縛られて、自分の生き方を見失ってきたと言えます。

そもそも「男は仕事、女は家庭」の性別役割分業は、戦後、高度経済成長を遂げる企業社会において、効率のよいシステムとして普及してきたものです。終身雇用のもと、男性は家族を養える賃金を保障され、企業の戦力となって長時間働き、女性は男性が仕事に専念できるような家庭を守ってきました。家族を養う責任を一身に背負った男性は、子育てや家事、あるいは地域のことなどには目もくれず、ひたすら働き続けてきたのです。『企業戦士』『仕事人間』などと呼ばれてきました。

そしてそのことが、過労死や中

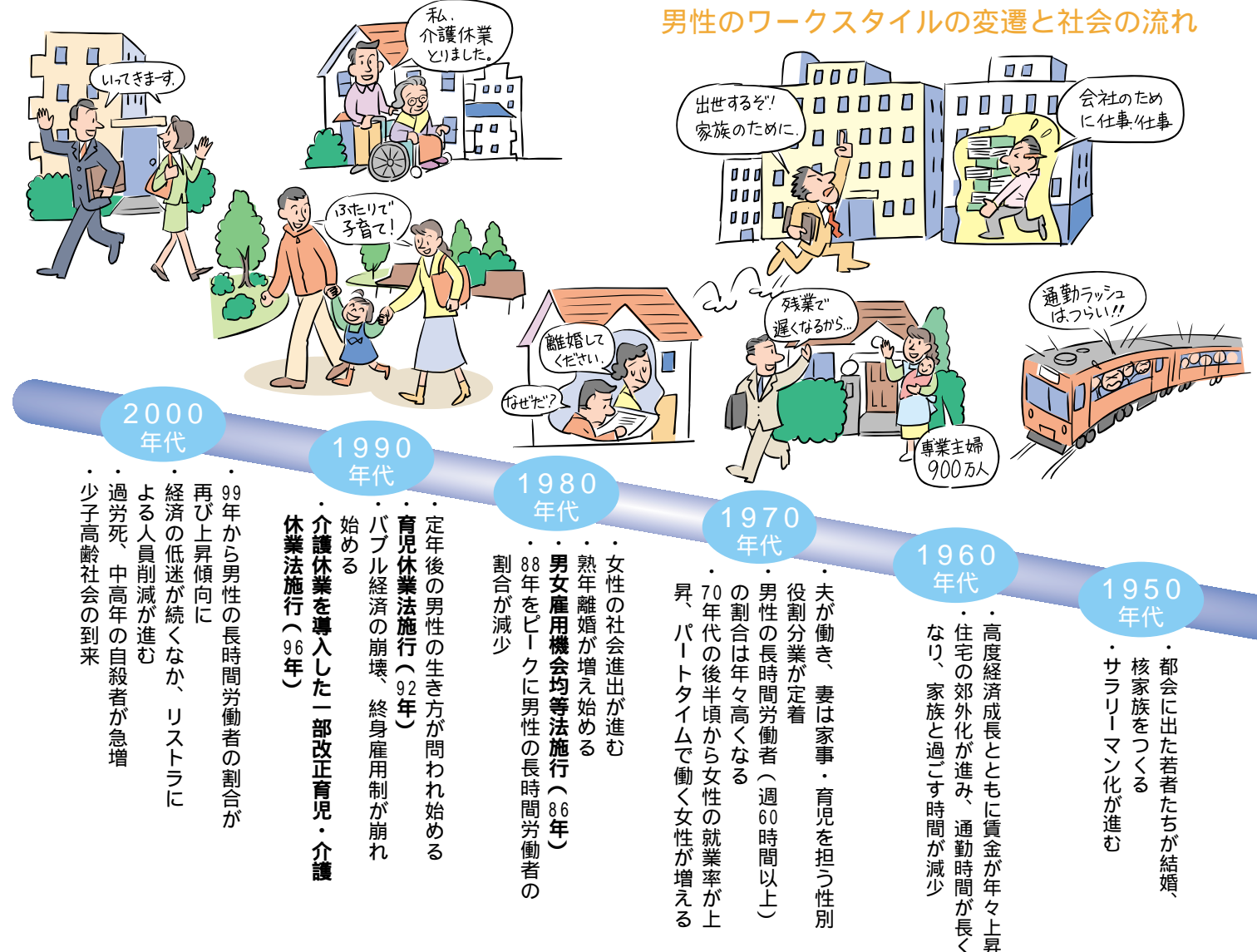
高年自殺の原因となり、さらには熟年離婚にいたり、定年後は生きがいを失い、孤独な人生を送る場合もあります。また、近年の経済不況による労働形態の変化やリストラの波が、働く男性をいつそ追い詰めています。

これからのライフスタイルに向けて

これまで性別役割分業が、男女それぞれの生き方を狭めてきたにもかかわらず、広く受け入れられてきたのは、経済も順調で社会のシステムとしてうまく機能していたからです。

しかし、社会の構造が大きく転換し、男性一人の収入で家計を支えていくのが難しくなっています。仕事を始め家事、育児など、生きるために必要な活動を男女が共に担っていくことが求められています。仕事中心の男性の生き方を見直すことは、男女が共にいきいきと自分らしく生きられる社会への一歩につながるのではないのでしょうか。

男性のワークスタイルの変遷と社会の流れ



男性自身が自分の生き方を見つめ直す時期にきています

「男性の抱えている問題」について
大阪大学大学院教授
伊藤公雄先生にうかがいました



いとう・きみお / 大阪大学大学院人間科学研究科教授、内閣府「男女共同参画会議基本問題専門調査会」及び「女性に対する暴力に関する専門調査会」委員などを務める。主な著書に『男らしさのゆくえ』『男性学入門』『できない男からできる男へ』などがある。

Q 過労死や中高年男性の自殺が増えている背景には、どんなことがあるのでしょうか。

長引く不況の一方で、男性自身が「男はこうあるべき」という鑑のよくなものをまとってきたことがあげられます。

例えば「男は仕事」という価値観が長時間労働に走らせ、さらに弱みを見せるな、感情をおもてに出すな、自分の問題は自分で解決するのが男だろといった固定観念によって、一人でつらい思いを抱え込み我慢に我慢を重ねてしまっている状況が作り出されているのです。そこに不況による雇用形態の悪化が様々なプレッシャーを与え、過労死や自殺を招いているのだと思います。

Q 定年を迎えた男性の場合は、どんな問題があげられますか。

一番の問題は、仕事を理由に夫婦のコミュニケーションをはかっていたことがなくなることです。ようやく仕事から解放され、老後は二人で旅行でも、と思っていると、妻からいきなり離婚を言い渡されてしまふ「定年離婚」が増えてきているのが顕著な例です。さらに「夫在宅ストレス症候群」といって、夫に家にいられるだけで妻がストレスを抱え病気になるケースも増えています。これは男性にとっても相当ショックなことでしょう。自分が家にいるだけで、最愛の妻が病気になるようになってしまつたのですから、こうした状況を見ても、やはり男性自身が自分の生き方を見つめ直

す時期にきているのだと思います。

Q これから定年世代が増えてきますが、こうした問題に気づいて変わるうとしている男性はどれくらいいるのでしょうか。

ここ数年、男性講座の受講者は増えていきます。しかし、まだまだ多くの男性が自分の生き方を問い直すところまでは踏み込んでいないのです。

なぜなら、男性は変化が恐いのです。女性は、仕事、結婚、出産など人生の選択肢において様々な変化を求められてきていますが、男性のライフステージは仕事が終わるまで、仕事以外で変化を求められた経験がなく、踏み出すための勇気が持てないのだと思います。

Q 踏み出すためのアドバイスをお聞かせください。

ちょっとした勇気があれば変わるものです。まずは小さな一歩を踏み出してみることです。例えば自分の酒の肴くらいは作ってみるとか、妻が外出しているときに、自分で買い物をして食事を作ってみるとか、衣食住の基本的な自立から始めてみる。一度体験してみると、新鮮な発見に出会うものです。ワンパターンの発想を変えるには、気づきと認識と体験を

繰り返すことが大切なのです。

Q 男女が共にいきいきと生きられる社会に向けて、どんなことが必要でしょうか。

仕事ばかりの人生、家庭ばかりの人生では充実感が得られません。男女が共に様々な分野でいきいきと生きられることが大切なのです。それには男女共に働かざるを得ない社会にしていくことが必要です。

それを可能にするのが短時間労働の導入です。いまヨーロッパでは1日6時間労働の声も出始めています。これなら朝9時に出勤しても4時には帰宅できます。育児や介護のサービスを手利用すれば、男女共に仕事と家庭の両立が可能で、家族団らんや余暇を楽しむ時間も持て、地域活動にも貢献できます。もちろん二人で働くわけですから計12時間労働で一人は10時間働くと収入よりも世帯収入は増えるわけです。

ただし、これには賃金格差など男女平等の労働条件の確立が大前提となります。これからは、個人のライフスタイルにおいてフレキシブルに働いても、不利な労働条件にならない仕組みづくりを進めていくことが求められます。

男女共同参画のまちづくり応援情報 ~ひとりで悩まずご相談ください~

相談内容	相談機関	電話番号	受付時間等
心の健康についての不安や悩みの相談	さいたま市「こころの電話」	851-5771	9:00 ~ 16:00 (土日・祝日を除く)
不安や悩みの相談	(社会福祉法人) 埼玉いのちの電話	一般相談	24時間 365日
		こどもライン	金・土 15:00 ~ 21:30